

泥を養分にするハス

ハスは、泥沼を養分にして純白な花を咲かせます。私たちも、純不純、善悪、清濁をのみあわせて生きているわけです。煩惱の泥に沈み、苦悩に満ちた人生を歩んでいても、悪に染まらなければ蓮華の清らかさと同じです。

私たちの本心は、本来は清浄です。仏の教えを聞く耳を持っています。悪魔の声には耳をふさぎます。仏の教えを心に受け止めれば、たとえ欲に溺れていても、蓮が泥を養分にして花を咲かせるように、自分の間違いに気づくことができます。そして、正しい道を歩むことができるようになります。私たちは、悪を求めるのではなく、善なるものを必然的に求めているのです。

◆蓮華の浄しと雖も泥を離れざるが如し 即ち善悪不二なり

蓮の華は純白にして清らかであるが、
泥を養分にして咲いている。
もともと善悪の区別はなく、
この両者は一体のものである。

弘法大師のこの名言は、発想の転換をはかって、苦境をバネにするという意味にも解釈できます。これまでの苦勞がエネルギーとなって、その苦勞を丸呑みできる心の余裕があれば、自分劇という傑作ができるはずです。嫌な性格も、それを磨いて伸ばせば、誰にも負けない立派な個性になります。

心には悪魔と仏が同居しています。しかし本心は悪ではなく、善なる仏の性質です。月は雲によって隠されますが、月がなくなったわけではありません。雲が去れば煌々と輝く月が現れます。

真言宗の教えは、悪の自覚よりも、善の自覚に重点をおく宗教です。